【自由題・詩】　一般の部

ともなり文芸大賞

釜の蓋

さくら市　青木　一夫

この年になると恥ずかしさよりも
感謝の気持ちで一杯になるのだ
親とはそういうものだ
財産もなく読み・書き・そろばんの
いずれにも恵まれず生きる手段に
土方をしていた吾の父と母だ

母は夜鍋仕事に
吾の靴下の穴を繕い
ズボンの膝にも継ぎを当てている
父は小刀で吾の鉛筆を一本・一本
しゅり・しゅり・しゅりと
黙って削っている
吾は炬燵で二親に囲まれ
本を読んでいる
家にはまだテレビもなく
静かな静かな夜だ

親の七光は何もなかったけれど
愛は十分に満ちていたはずだ
あれから何年経ったやら
父も母も既に十万億土の
西方浄土に仏となっている
二親の生きている間に吾には
楽をさせることもできなんだ

八月のお盆の月が今年も巡り来て
釜の蓋が開き二親は家に戻り来る
あの世からの道程は遠く途中で
腹を空かせては難儀のことだろう